



Title	Blakeの詩における狂気 : The Four Zoas研究
Author(s)	日比野, 真己
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1991, 25, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47860">https://hdl.handle.net/11094/47860</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# Blake の詩における狂気

—The Four Zoas 研究—

日 比 野 真 己

## 1

「私は狂人だと呼ばれている」と Blake は書き残している。<sup>1)</sup>

「狂人」のレッテルは生涯詩人に付纏い、作品が広く世に出る妨げとなったことは良く知られている。作品が正当な評価を得るに至った背景には多くの批評家の努力があったことはいうまでもないが、彼らは一様に、詩人と狂気の関係の断ち切る必要性にかられていた。*Fearful Symmetry* の著者 Northrop Frye は、Blake が狂人だということを主張するのはもはや無意味であるとし、狂気は何の批評的意味も持たないと述べている。<sup>2)</sup> Blake の作品が明るみにだされると同時に狂気は闇に葬り去られたのである。

しかし、Michel Foucault が『狂気の歴史』の中で、まさに狂気に批評的意味を見だし、「理性と未分化な状態にある狂気」を論じて以来、<sup>3)</sup> 今では多岐にわたる知的活動の分野で狂気の再認識がさかんに行なわれている。Blake 批評においても狂気が批評的意味を取り戻す必要性が充分あることは1989年に *Madness & Blake's Myth* が出版されたことから理解できるだろう。<sup>4)</sup> この著作は、Blake が *The Four Zoas* の中で狂気を描くことにより詩人が狂気を免れ、健康を取り戻していると論じている。しかし、この著者が詩を「狂気の症状」と見ている限り、抑圧された狂気

の権利は復権されていないように思えるのである。私には狂人と呼ばれた詩人が狂気という現象をどのようにとらえていたのかが重要であるように思われるのである。

狂気はもはや、ある人が恐怖を抱く人物や病気のことをさすだけではない。Roland Jaccard は、狂気の周辺で起こる状況は、「レッテル貼り」であり、最初に他者に「狂人」のレッテルを貼るのに成功したものが勝利者となり、反対に「狂人」のレッテルを貼られたものは、以後、犠牲者の役割を演じることを強制され、言葉を奪われ、社会からも排除されると指摘している。<sup>5)</sup> 作品を狂人のたわごととされていた詩人は言葉を奪われたものに等しく、後者の立場にあった。狂気の周辺に強者 / 弱者の権力関係が厳然と存在することを Blake は、'If others had not been foolish, we should be so'<sup>6)</sup> という言葉の中で読み取っていたにちがいない。*The Four Zoas* が書かれたのは「狂気」のレッテルに悩む詩人の最も困難な時期であったとされている。筆者は、このような不利な事態のもとで詩人自身が狂気の立場をどのように捉えていたか、かつ、狂気を詩のなかに取り込みポジティブに利用しているかを考え、分析してゆく。

*The Four Zoas* は、一つの世界であり、かつ一人の巨人的人間である Albion が墮落し、四つの Zoas (ギリシア語で「生き物」を意味する) に分裂し、互いに争いを繰り返し、最後に救済され、また一人の人間へと統合されることを描いた未完の叙事詩である。各々の Zoas は墮落したときに別の形態に分裂し、またそれぞれ emanation と呼ばれる女性的分身をもつ。そしてさらに墮落すると spectre になるのである。

本稿の分析の中心となるのは、四人のうちの一人 Urizen である。彼は王であり、立法者、権力者である。Urizen=your + reason からみても分かるように、Urizen は理性を体現している。常に contrary state を念頭においているこの詩人の詩的世界では、天国と地獄とは同時に生まれ

るのであるから、理性が問題になるとときには、その背景には必ず狂気が存在するはずである。この理性 Urizen の背後に潜む狂気を考察することはとりもなおさず詩人の狂気観をうかがうことなのである。

## 2

四人の Zoas のうち理性 Urizenが他の Zoas を支配したがゆえの世界の崩壊の様が描写されている詩は、まさに詩人が理性のみが支配する世界では存在しえないことを物語っている。しかし、Blake は理性をあらゆる人物に通常とは異なった意味をもたせていることがわかる。Urizen は権力の座についているときは、専制君主然として他者を法律で縛り、抑圧することが出来るのであるが、権力を失うやいなや何人からも理解されず、自分の子供たちにすら虐げられる。初期予言書の専制君主 Tiriel が子供達に虐げられ、「気が狂って」杖を手にもち荒野を彷徨うのと全く同じ姿態をこのとき Urizen はとるのである。特に興味深いのは、かつて権力者であった Urizen の話す言語を誰も理解しない場面である。それは、あたかも我々が狂人の話すことに意味を見出せないという状況に酷似している。つまり、Blake の詩的世界は常に権力関係の転覆の可能性をはらんでおり、理性は確固としたものではなく、いつでも、狂気のように社会的排除の対象となるのである。理性とは時に狂気であるという姿を描くことにより Blake は理性／狂気の分割は誰が支配権を掌握するかによるということを見事に示している。

しかし、Blake がこのような狂気に類似した理性を描くことによって示そうとしたのは、理性は墮落すれば狂気になるということではなく、理性も狂気も実は同じものであり、理性も「狂気」のレッテルを貼られる可能性があるという側面を同時に持ち合わせていることなのである。このことは Blake が権力をもつ Urizen にかに病理的狂気の性質を付与してい

るかを見ることにより理解できる。

しかし、その前に述べなければならないのは、Blake は全く狂ってしまった世界を描いているのであるから、この詩の中で Urizen のみが狂気の様相を帯びているというわけではないことである。例えば、Luvah は一種の「狂人」である。なぜなら、Urizen と争っているにもかかわらず、彼は「自分自身に怒りをぶつけて」(I: 234) いるからである。Luvah は攻撃エネルギーを本来ならば Urizen に向けるのが普通なのだが、アブノーマルに、つまりマゾヒスティックに攻撃本能を自己にむきだしにしているのである。また、「死が私の欲望である」(VI: 58) と語る Tharmas も、本来ならば対象(Urizen)に攻撃的本能を向けるところを自己(ego)に向けている。Albion も同様に、ナルシスティック・リビドーが自己に向い、‘watery vision of man’ (III: 49) ‘his own shadow’ (III: 56) という自分の鏡像に完全に魅せられてしまっているのである。通常の大人の生活では、リビドー・エネルギーをこのように対象から完全に ego の方に引き込んでしまい、この対象から自己に向ったリビドー・エネルギーが極めてナルシスティックな度合に達すれば、精神病を引き起こすとされている。<sup>7)</sup> しかし、一人の人物の内部だけに限られたメタ・サイコロジーはこの議論では適当ではない。狂気を社会との関わり方においてみるために、理性 Urizen が世界や他者との関わりかたにおいていかに病的に狂気の色を帯びているかを次に述べよう。

### 3

Urizen の存在の本質は、非存在 (non-existence) へ解体してしまうことへの恐れである。このことは、他の Zoas にもあてはまる。例えば、Tharmas は ‘I am like an atom, A nothing left in darkness!’ (I: 53-54) と嘆き、Enion は、‘substanselless, voiceless, weeping vani-

shed, nothing but tears' (IV : 194-195) とされる。Enitharmon は、  
'Now I am nothing' (II : 587) と語り、Albion さえ、'O Lord, whence  
is this change? Thou knowest I am nothing' (III : 52) と嘆息する  
のである。そして Los と Enitharmon は母親を「暗い絶望のなかに渦  
巻く非存在へと」(I : 136) はねつけている。かくしてほとんど全ての人物が  
'the margin of non-entity' (III : 205) に立たされていることが  
わかる。

R. D. Laing は『引き裂かれた自己』の中で、「カオスの非存在の状態  
を最もよく描写しているのは Blake の予言書である」と述べている。<sup>8)</sup> 精神  
分裂病質 (schizoid) の個人は、この混沌とした非存在状態へと引き込  
まれることに非常な恐れを抱いており、現実とは彼にとって、自己の存在  
を飲み込む深淵であるというのである。非存在へと解体されることから自  
己を護るために、分裂病質の人は自分を self-experience と body-ex-  
perience<sup>9)</sup> に分ける。分裂病質の人にとっては body-experience とは世  
界となんとかうまくやってゆくため、自己を保存するための道具にすぎな  
い。言い換えれば、self-experience は「真実の自己」であり、それを護  
る body-experience は「偽りの自己」である。そこで *The Four Zoas*  
の中の人物にもこのことがよくあてはまるので Urizen を特にこの観点  
から細かくみてゆく。

Urthona や Luvah は墮落した形態としてそれぞれ Los, Orc をも  
つが、Urizen にはこのような別の形態はないので、表面上では分裂して  
いないかのようである。しかし、墮落の結果としての別の形態は持たずと  
も Urizen は彼自身の内部で分裂しているのである。そして分裂病質的に、  
非存在となることを恐れるという、存在の問題を抱えている。彼の世界と  
の関わり方を見るために彼が独自の世界を構築したときの状況をみてみよ  
う。

Mighty was the draught of voidness to draw existence in.  
 Terrific, Urizen strode above; in fear & pale dismay  
 He saw the indefinite space beneath, & his soul shrunk  
 with horror.

His feet upon the verge of non-existence his voice went  
 forth.

.....  
 'Divide, ye bands, influence by influence.

Build we a bower for Heaven's darling in the grisly deep;  
 Build we the mundane shell around the rock of Albion.'

(II : 228-235)

この文から我々は Urizen が mundane shell と呼ばれる一つの世界を創ろうと決心するときに、non-existence をひどく恐れていることがわかる。Urizen の決心は存在を飲み込まれることに対する防御手段なのである。Urizen が自分の世界を構築するやり方はまさに精神分裂病質の人間が偽の自己の体系を築くやり方と同じである。彼らは共に自己を飲み込まれることを恐れ、彼らを壊しかねない世界とうまくやってゆくために、真実の自己と破壊的な世界の間の防御壁として、偽の自己の世界を創造するのである。

Urizen にとって、現実とはあまりに恐ろしいものゆえに、精一杯の力を駆使して絶望から自己を防御しようとふるまうのである。したがって、Urizen は他者、特に他の Zoas を Urizen の存在を脅かすゆえに邪悪とみなし、自己の存在を護るために他者の存在を征服しようとするのである。主体的な存在である他者は、分裂病質的な弱い存在を引き込んでしまふ。分裂病質的な個人がもつ、他者への恐れに関し、R. D. Laing は、

「分裂病質者が空虚を感じている限り、他者が充実し、実体的に生きているという実在性は常に手に負えず、内破的な (implosive) 侵害なのであり、ガスが真空を消し去ったり、水が空のダムにほとぼしり出てすっかり満たしてしまうように、自己を完全に圧倒し、抹殺しようとする」と述べている。<sup>10)</sup> Urizen の世界が空洞であることは、それが「現世の殻」と呼ばれることから分かる。したがって、Urizen の構築した世界では、彼の精神状態を反映して、人々は他者に恐れおののき、青ざめて、互いに、  
'What? are we terrors to one another?' (II : 334) と呼び合うのである。彼らは Urizen の代弁者となり彼の懸念を表明している。Urizen が彼らと同じ状態であることは、'Urizen, who was faith & certainty, is changed to doubt' (II : 315) から分かる。彼にとって他者とは存在を脅かすものであり、排除されるべきものである。

したがって、Urizen の創造した「現世の殻」という世界は充実した他者が存在せず、無生物的なのである。そこではまず建設者が死のイメージをもつ 'scaffold' (「断頭台」もしくは「足場」) を造り、全く幾何学的な世界を構築する。「現世の殻」では建設物や自然の事物が異様に目立ち、生命がほとんど感じられない。あるとしてもそれらは、キャラクター性のない労働者や商人、及び無数の奴隷や、弱者、死者という、主体性を持たない生き物である。Urizen は他の Zoas がこの世界に足を踏み入れることを許さない。彼は生命感あるものではなく、静物に囲まれていなければ安らぎが得られないのである。

死物に満ちた Urizen の世界に比べて、Blake の初期の叙情詩の世界は生命感に満ち溢れている。そこでは、四季が人間性を持ち、生き物のように目や鼻、声、手足、指、髪、そして血脈を持っている。<sup>11)</sup> このような自然物の生命感の充溢さえも Urizen にとっては彼の自己を脅かし、凌駕しかねないのである。ゆえに、Urizen は自分が生命力ある他者に飲み込



まれ、自己を失うという最悪の状況の先手をうって、この生命力の源泉である想像力を石化せねばならないのである。

The tigers of wrath called the horses of instruction from  
their mangers :

.....  
In human forms distinct they stood round Urizen, prince  
of light,

Petrifying all the human imagination into rock & sand.

(II : 245-248)

彼の世界では人間が人間性を剥がれ、動物が反対に人間性を帯びている。この他にも、豹が「人間のような美しい様相」(II : 244) をもっていたり、鷲が「きわだって人間の形相をしている」(II : 361) とされるのは、他者の人間性は Urizen の人間性を消し去るがゆえに彼が本当の人間性を恐れているからである。Urizen の世界にとって、生命力の不可欠な源である想像力は、充実した人間性と同じく、彼を飲み込んでしまい、物質的世界である「現世の殻」を脅かすまさにその張本人であるのでまず、想像力を石化せねばならないのである。ゆえに、Urizen の王座は 'throne petrific' (III : 127) と称されているのである。彼は自己の存在を欠いていて、彼の内部は空虚なゆえに他者の存在は彼を内から破裂させかねないのである。

Laing の心理学では石化 (petrification) は分裂病質者の存在論的不安を理解する概念である。第一に石化はそれによってある人が石にされてしまうような恐怖の特殊な一形態であり、第二には生きた人物から死物、石等、人格的な行動の自律性のないもの、主体性のない「それ」に変えられる可能性に対する恐怖である。第三の意味が Urizen にあてはまるのだが、

それはひとを石化することにより、他者の自律性を無視し、その生命を抹殺し、石に変えてしまうための魔術的行為である。<sup>12)</sup> Urizen の場合石化は他者の生命力に飲み込まれない為の先手防御なのである。Urizen の ‘thunderous throne petrific’ (III : 127) という権力はただ自己の存在を守るための分裂病質的恐怖から生じているに過ぎない。

第二の意味での石化への恐れは実際に現実となり、Urizen の世界は崩壊する。そこでの彼の姿態は、‘Urizen slept in a stonied stupor in the nether abyss, A dreadful horrible state’ (IV : 170) と描写される。この結末は遅かれ早かれ確実なものであった。というのも彼の世界はつらい現実の代償としての幸福な楽園ではすこしもないからである。非存在への恐れから生じた世界では、この恐れが絶えず彼を悩ませているので、彼は満足できるはずもなく、ただ自己を護ることに必死なのだ。このように「偽の自己」としての世界は、単なる幻想と異なり、「真実の自己」を護るためにすてばちに築かれた最後の砦にすぎない。

Urizen の世界が空虚なのは、‘To him his labour was but sorrow, & his kingdom was repentance’ (II : 418) の文に見てとれよう。彼も分裂病質者も同様に、不安を持っている限り外部の世界が彼らを脅かし続けているのである。このように現実と共存的な関係を保てない人は、世界との間に裂け目を持ち、自己との関係においても分裂しているのである。このように二重の仕方で引き裂かれているのが分裂病質者の特徴である。<sup>13)</sup> Urizen は現実の世界と裂け目を持つがゆえに独自の世界を構築するが、彼は自分の世界においても幸福でないので、真実の自己との間にも亀裂を持っているのである。

非存在へ解消されることを恐れるがゆえに世界をつくった Urizen ではあるが、その努力にもかかわらず、Urizen はすでに存在を欠いている。

Repining, he [Urizen] contemplated the past in his bright  
sphere,

Terrified with his heart & spirit at the visions of futurity  
That his dread fancy formed before him in the unformed  
void. (II : 502-504)

自己の世界を造ったこの瞬間でさえ彼は現在的な時間を生きていない。  
Urizen は過去に留まり、未来におびえているがゆえに現在と正常な関係  
を結べないでいる。彼が現在の実在を持たないことは、Ahania によっ  
ても「何故汝は未来を見つめ、現在の楽しみを暗くしているのか」(III : 10)  
と語られる。Ahania は Urizen の存在が現実根ざしていないことを  
指摘しているのだが、彼は頑固に聞き入れない。ゆえに再びこの真実が  
Orc によって「汝の頑固な筆は未来をひどく恐れながらも未来の驚異を  
なお書き続けている」(VIIA : 86) と指摘される。また Urizen の書く書  
物は他の所で、「深遠のとてつもない驚異、かつての彼の輝ける楽しみ」  
(VI : 86) と語られる。かくして彼が過去と未来に束縛されている限り現  
在の存在は欠如している。彼の tree of mystery という他者を束縛する  
宗教はこのような欠如から生じているのである。

しかし、彼は非存在となることを回避していながらも、自分が存在を欠  
いていることを潜在的に知っていることを察しできる場面がある。それは  
彼が Orc の存在に同情して以下のように語る場面である。

[Thou art] Bound here to waste in pain

Thy vital substance in these fires, that issue new & new  
Around thee.

.....  
Pity for thee moved me to break my dark & long repose,

And to reveal myself before thee in a form of wisdom.

(VII A : 47-58)

ここにみる「同情」が、Urizen は Orc と自己を同一視化していることを露呈している。同情は同一視化 (identification) なしで存在しない。Sigmund Freud の説明によれば、同一視化は単なる模倣でなく、同じ病因を持っているという主張の上になりたつ同化であり、無意識の中にある共通の要素から生ずるのである。<sup>14)</sup> Urizen の無意識にある共通の要素とは Orc が Orc 自身の身体からでる炎で身を焼きつくしているように、自己の創造物によって自己の生命の実体を破壊していることである。Urizen は分裂病質的に偽の自己という創造物によって自己を破壊しており、Orc と同一視化することにより無意識的に自分が非存在であることを認めているのである。

最終的に Urizen の石化と非存在を招いた状況を調べてみれば、Urizen の世界の崩壊をもたらしたのは、彼がエマネーションである Ahania を打ち、彼の胸から外へ投げ出したときであることがわかる。以下がその時の彼の Ahania への言葉である。

And thou hast risen with thy moist locks into a watery  
image,

Reflecting all my indolence, my weakness & my death,  
To weigh me down beneath the grave into non-entity.

(III : 119-121)

彼にとって Ahania は彼の弱さと死を映す鏡像であり、それを見ることは彼自身の非存在の恐れに直面することになる。自分の非存在を否定するために彼は Ahania を排除するのである。このような自己を保存しよう

とする試みは全て失敗に終る。なぜなら Ahania は Urizen の欠くことのできない一部であり、墮落した世界では離れていても Blake の理想の世界である Eternity では彼らは一つなのである。ゆえに、Ahania を追いつくことは Eternity の存在からさらに遠のくことであり、偽の自己、つまり Urizen の世界がこのときに崩壊の極みに達するのである。

いままで偽の自己を論じてきたが、Urizen の真実の自己とは何であろうか。Laing 心理学では偽の自己とは他者の意図や期待にそうためのもの、「他者がかくあれというものに対する返答」であるとされている。<sup>15)</sup> Urizen が分裂病質者であるならば彼の偽の自己の体系は誰かの意図である。Albion が彼に、‘Take thou possession! take this sceptre! Go forth in my might.’ (II: 215) と命じているのであれば、Urizen は Albion の意向に従っていることになる。そうすれば、Urizen の真実の自己とは一体何であろうか。分裂病質者も含めて、これは本人には不可知であり、本人がそうありたいと思う姿では存在できない。それゆえ彼らはますます真実の自己から疎外されてゆくのである。

しかし、Urizen に真実の自己はわからないにしても、Ahania という他者によって伝えられている。

‘O prince, the eternal one hath set thee leader of his  
hosts;

Leave all futurity to him, resume thy fields of light.’

(III: 26-27)

Urizen は Ahania の意見を聴いて、知性の光りの領域に留まるべきだったのであるが、彼女を排除しますます真実の自己から疎外されてゆく。また、Orc も Urizen に、「お前がいまやわかったぞ、Urizenよ、光りの王よ／おれはお前を知っている！ これが勝利か、神のような様か／灰色

の不透明のなかの知の領域を踏み越えて横たわっている」(VII A : 148-150) と指摘している。Urizen は知の領域を越えてはならなかったのだが、ここでも Orc の言葉を見做して彼を蛇に変えてしまう。世界はますます混乱し、救済は最後に神の子羊によって達せられるのを待たねばならない。Urizen の自己保存の闘争は全て、彼を現実世界と自己からも疎外してしまふ結果となる。存在しようともがけばそうするほど彼は疎外された姿を露わにする。ここでは世界や自己とうまくやってゆけない Urizen を分析した。彼は理性の体現者にもかかわらず、他のどの人物よりも自己と他者との関係において分裂病質的である。このように、狂気として存在する理性に私は Pascal の言葉を想起させられざるを得ない。「人間は必然的に狂っているので、狂っていないことも狂気の別の形態なのである」<sup>16)</sup>と。

## 4

Blake は詩の中で理性と狂気を逆転させていたが、だからといって詩人は理性を排除しようとしているわけではない。まず、他の人物に先駆けて再生されるのは Urizen なのである。Albion が混乱に気付いて目を覚ましたときにまず呼ぶのは理性 Urizen であり、そのときの彼は若い青年に再生されている (IX : 191)。このことから詩人は新しく再生された、正当な理性を要求していることがわかる。あらゆる理性的なものを排除しているかにみえる Marquis de Sade も「神という馬鹿げたナンセンスを優れた社会原理と置き換えろ」<sup>17)</sup>と叫ばずにいらなかった。

Blake はこの詩の冒頭に書いている。

And thus beginneth the Book of Vala, which whosoever reads

If with his intellect he comprehend the terrible sentence.<sup>18)</sup>

この詩が「知的戦いの日のため」(I : 3) に始まり、そして Urthona の「知

的戦争」(IX : 851) のための準備で終わっていることを考えるとこの箇所  
で詩人は、いままでになかった新しい理性を意味していることになる。詩  
人がこの詩を書いているときに同時代の人々が彼を理解しないことに苦し  
んでいたことをみれば、Blake はこの詩で、彼の詩を理解すべき新しい  
知性、すなわち新しい理性を希求しているのである。

テクスト William, Blake, *The Poems of William Blake*, ed. by W. H. Stevenson (London : Longman 1971)。引用箇所は、九つに分けられた「夜」をローマ数字で、詩の行数をアラビア数字で、本文中の括弧内に示した。

#### 注

- 1) William Blake, *Complete Writings with Variant Readings*, ed. Geoffrey Keynes (Oxford : Oxford University Press, 1979), p. 538.
- 2) Northrop Frye, "The Key to the Gates," *Romanticism and Consciousness*, ed. Harold Bloom (New York : Norton, 1970), p. 233.
- 3) Michel Foucault, *Madness and Civilization : A History of Insanity in the Age of Reason*, trans. Richard Howard (London : Routledge, 1989), p. xi.
- 4) Paul Youngquist, *Madness & Blake's Myth* (Philadelphia : The Pennsylvania State University Press, 1989). また、他に Blake と狂気の問題について論じたものは、Andrew M. Cooper, "Blake and Madness : The World Turned Inside Out," *ELH* 57 (1990) : 585-642.
- 5) Roland Jaccard, *La Folie* ((Paris : Press Universitaires de France, 1979), p. 35.
- 6) *The Marriage of Heaven and Hell*, III : 52.
- 7) J. Laplanche and J. B. Pontalis, trans. by Donald Nicholson-Smith, *The Language of Psycho-analysis* (London : Karnac Books, 1988), p. 150. "Ego-Libido/Object-Libido" の項参照。
- 8) R. D. Laing, *The Divided Self : An Existential Study in Sanity and Madness* (London : Penguin Books, 1965) p. 162.
- 9) Ibid., pp. 66-68.
- 10) Ibid., p. 77.

- 11) Blake の *Poetical Sketches* の中の詩 “To Spring,” “To Summer,” “To Autumn,” “To Winter” 等参照。
- 12) Laing, p. 46.
- 13) Ibid., p 17.
- 14) Sigmund Freud, *The Interpretation of Dreams*, Vol. 4 of *The Pelican Freud Library* (London : Penguin Books 1985), p 233.
- 15) Laing, p. 98.
- 16) パスカル著 津田 穰訳『パンセ』（東京：新潮社，1988），414。
- 17) Marquis de Sade, “Français, encore un Effort si vous voulez être Républicains.” *La Philosophie dans le Boudoir*, vol. 3 of *Oeuvres Complètes du Marquis de Sade, édition, définitive*, (Paris : Les Presses de Limprimerie Blanchard, 1963), p. 486. 訳は著者。
- 18) Keynes 版 I : 3-4. この行は Blake によって後に削除されている。

（大学院後期課程学生）